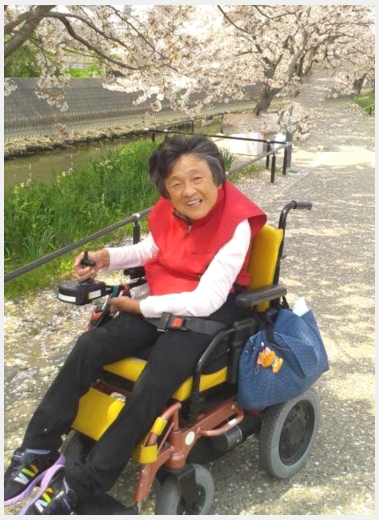
広報 土づくり 2月

地方にも事業所を

生まれたときから四肢麻痺だった松原幹枝さん。勉強家でパワフルな松原さんは、常に自ら道を切り開き、地元の福祉に貢献してきました。今回は松原さんに、当社や介護福祉についての率直な意見を聞くことができました。



＜プロフィール＞
名前:松原 幹枝(69)
出身:愛知県半田市
障害名:脳性麻痺

入れなかった小学校

私は愛知県半田市で生まれ育ち、今年で69歳になります。実家が商売をしていた関係で、幼い頃はばあやに面倒を見てもらい、夜になると仕事を終えた母が世話をしてくれました。当時は、障害者は家の中でずっと生活して、外に出られなかった時代でしたが、私の家庭は少し違っていて、両親が「外に出なさい」と言うので、ばあやが毎日私を乳母車に乗せて散歩に連れて行ってくれました。それで近所に友達もできましたが、私は小学校に入ることができませんでした。学校は近くにあるのに、何度頼んでも入れてくれなかったし、当時は障害者が学校に入れる制度もありませんでした。

それでも学校に

実家は貧しかったのですが、両親が本やテレビなど、欲しいものはみな買ってくれました。だからいろんな本を読んで独学で勉強していましたが、それでも「学校に入って勉強したい」という気持ちが強くありました。

28歳の時、半田市に養護学校(現特別支援学校)ができたので、教育委員会に電話を掛けて入学をお願いしましたが、「年齢超過だし、知的障害の学校だから、あなたが入るところじゃない」と断られました。車椅子では入れないとも言われましたが、諦めきれず何度も電話を掛けました。

その頃、ニュースで高齢になってから小学校に入ったという健常者の人がいることを知ったので、「どうして障害者だけ年齢超過と言うのか」と新聞社にも電話しました。すると、彼らが「私たちが動く」と県の教育委員会に掛け合ってくれて、ようやく入学することができました。

学校生活とその後

学校生活は自宅学習でした。私は毎日通いたかったのですが、知的障害者の学校だったので、週に2回、先生が家に来て勉強を教えてくれました。籍は小学4年からでしたが、私は「初めからやりたい」と、小学1年(一般と同じ教科書)の勉強から始めました。最初のうちは1年間で3年分の勉強をするという感じで、中等部まで6年間、ずっと訪問授業を受けていました。

卒業前に、名古屋にできた養護学校の高等部を受験して合格したんですが、名古屋まで通うことができなかったので入学を諦めざるを得ず、34歳で中学を卒業した後はずっと家で生活していました。半田市には重度身体障害者の施設や車いすを使う人が行けるデイサービスもなく、働くところもなかったんです。それでも外出にはよく行きました。ボランティアサークルを作って、ボランティアの方と毎月名古屋に出掛けたり、映画もよく見に行きました。一人でも行きました。障害者の会の役員も務めていて、バザーを開催したり、車椅子で入れるお店のマップ作りもしたりと色んな活動をして、24時間テレビやラジオにも出ました。

現在の生活

母が18年前に亡くなって、そこから一人暮らしをしています。私は半田市で初めての重度訪問介護の利用者ですが、それまではヘルパーさんに1日2回、1時間ほど来てもらっていました。12歳頃から自分で座ったり、食事したりと、不思議と動けるようになって、少しは身の回りのこともできていたので、着替えや調理以外は自分でしていました。

土屋との関りは3、4年で、夜勤も含めて月に500時間弱入ってもらっています。その中で、あるヘルパーさんが1年かけて私の人生を紙にまとめてくれました。日中はデイサービスに行っていますが、今は二次障害もあって、また動けなくなり、好きな外出もできていません。ただ、外出できないのは、ヘルパーが外出を嫌がるからです。家の中にずっといるのは嫌なので、外に出てこれからの福祉を皆でどうつないでいくか、そういったことを勉強したいですし、やりたいこともたくさんあるんです。

65歳以上問題

65歳になると、制度としては介護保険のサービスを先に使ってから障害福祉サービスを使うというルールになっています。そして、障害福祉サービスを利用すると自己負担はゼロですが、介護保険のサービスを使うと、もろもろの費用を含めて毎月5万円ほどの自己負担がかかるようになります。私は今、介護保険ではなく障害福祉のデイサービスに通っていますが、それは半田市から特別に5年間の猶予をもらえたからです。来年70を迎えると介護保険のデイサービスに移らなければいけないかもしれない。今はそれが不安です。

私は働くこともできないし、年金ではとても自己負担分を払う余裕はありません。それに障害があると、普通の老人とは少し違って、一般のデイサービスではやりにくい場合もあるんです。その場合、施設に入らざるを得なくなるかもしれない。でも施設は鳥かごみたいなもので、どこへも行けない。決められた時間の中で決められた生活をしていたら、「命」がなくなってしまいます。

地方にも事業所を

障害者が人間らしく過ごすために、都会だけでなく、地域の市町村にも事業所があってほしいです。遠くだと、台風などでヘルパーさんが来られなかったりするし、ショートステイに行かなければならなくなる。24時間、支援に来てくれる体制を作って欲しい。すでに事業所があるところで活動するだけじゃなく、ないところで逃げないで戦ってほしいですし、そういうことも考えて土屋さんには手を広げて欲しいと思います。

土屋のアテンダントへ

寝たきりの人もいるけど、そういう人のことを良く分かってもらえるヘルパーになって欲しいと思います。ヘルパーさんがいて私たちの生活があるし、ヘルパーさんがいないと生活できない。どこにも行けないし、話も聞けない。ヘルパーさんにはいろんな話をしてほしいし、災害などの大変な時にも来てもらいたい。一人だと排便もできないし、電話も取れません。ちゃんと来てくれる、それがヘルパーさんの仕事だと思うし、お金のためだけに介護をするなら、してほしくないです。私の場合は、外へ出て皆と触れ合って、皆に障害者というのがどういうものか見てもらいたいし、感じてもらいたい。いろんな人とお話して勇気をもらって、私も皆に勇気を与えて、福祉についてもっと分かってもらいたい。そういった利用者の想いもヘルパーさんには考えてほしいです。

お知らせとお願い

土屋　委員会推進室からお知らせです。
クライアントの皆様の声をお聞きしたく、ケアサービスについてのアンケートを実施いたします。
皆様のご自宅にアンケート用紙を1/20頃お届けいたしました。
郵送またはWEBにてご回答ください。

WEB回答用URLはこちら

アンケート回答期限　2/20

家族あるあるヤングケアラーって

先月号で告知していた「ヤングケアラー」とは、5歳～18歳で、本来大人が担うと想定されている家事や家族の世話などを日常的に行っている子供のことです。家事や家族の世話をしているために時間がなくて宿題もできない、友達とも遊べない、子どもらしい生活が送れない子供が大勢います。元ヤングケアラーによると、本人も家族も「家族だから当たり前」と思い、また、本当は辛くても言えない。年齢が大きくなってくると、思春期でただでさえ苦しい心が「自分か家族か」どちらを優先させるのかでも苦しむようになります。過度な負担となって学校にも行けず、そのまま就職も出来ない大人に移行する人もいるそうです。誰かに助けを求めても良いということを知らないヤングケアラーを、見つけることが最優先だと国も気が付きました。まずは「知る」って大切です。私は今まで、障害者・難病者のことを「知ってほしい」と思ってきました。「苦しい辛い思い」を人に伝えるのは葛藤がありますが、知ることから始まる新しい助けも沢山あると思うからです。それと同じだと思います。幸い我が娘は「介護は全部自分でしなくてもいい」と知っていて「助けて」って言えます。もし身近に思い当たる子が居たら「困った時は、助けてって言っていいんだよ」と、教えてあげてください。

夫が脳性麻痺一種一級の障害者　こもとゆみこ

広報・土づくりへの ご意見・ご感想

株式会社土屋の各種取組みについてのご意見や、当社介護サービスにおいて虐待や不当な身体拘束が疑われる場合がありましたらご一報ください。

ご意見・お問い合わせ窓口
client@care-tsuchiya.com
土屋
本社:岡山県井原市井原町192番地2久安セントラルビル2